太宰治『女賊』論
――承認のための執着――

A study of Dazai Osamu's "Nyo Zoku"

*舘下徹志
Tetsushi TATESHITA

はじめに

後に『女賊』（『新釈諸国噺』昭和20・1、生活社）と改題される短編小説『仙台伝奇 髭候の大尽』が「月刊東北」（一巻三号 河北新報社）に掲載されたのは、昭和十九（一九四四）年十一月のことだった。太宰治はこの年すでに、井原西鶴の浮世草子に「まつはる私の空想を自由に書き綴り」（『新釈諸国噺』「凡例」）、『裸川』（「新潮」昭和19・1）、『義理』（「文藝」昭和19・5）、『貧の意地』（「文藝世紀」昭和19・9）、『人魚の海』（「新潮」昭和19・10）の四編を発表していた。

『女賊』は、井原西鶴の『新可笑記』（元禄元・一六八八・十一月刊）巻五・四「腹からの女追剝」に着想を得て翻案された作品である。[1]『武道伝来記』（貞享四・一六八七・四月刊）、『武家義理物語』（貞享五・一六八八・二月刊）に続く〈武家物〉の第三作として刊行された『新可笑記』は、「中古武道の忠義、諸国に高名の敵討」（『武道伝来記』序）をめぐる逸話や「義理に身を果せる」「古今その物がたり」（『武家義理物語』序）に盛り込めなかった話材を集めた浮世草子であった。巻五の目録を見ると、「腹からの女追剝」には、「武士は其時に替る子供の事」という副題が付けられている。父に倣い「追剝」を生業とする姉妹の母は武家の出身だったことになる。終盤、「はらからの女追剝」が罪業の自覚から発心へと至る展開に、道理に忠実な武家の〈義理〉を見るのである。

「腹からの女追剝」に描かれる姉妹は、「無用の物を拾ひて其れから心の外の欲心発り」、相手の「命を取りて残らず吾物にと」、ともに「悪心」を抱く。「物には同気相求むる事善に在り、悪に殊更なり」という心の同期現象は、発心においても起こった。五世紀初頭、鳩摩羅什が漢訳した『大智度論』に原話が見られる、「少金の為」に「悪心」が生じる「因縁」を説く物語である。その後引き継がれるこの話型はいずれも「兄弟」の「断金の契」[2]（『宝物集』）に帰着することから、それを「絹」への妄執に囚われた「腹からの女」の発心譚に書き換えたのは西鶴の独創と考えられる。

『女賊』に関する研究は、「腹からの女追剝」との比較をとおして、太宰による脚色の特徴を明らかにすることを中心に進展してきた。木村小夜は「原典からの改変」を丁寧に整理したうえで、「自らの悪業を悔い懺悔する発心譚に、『血筋』を持ち出すことによる罪への無自覚が対置され」た翻案に、「自己像の幻想から自由になることの困難」を読み取る。[3]また、杉本好伸は西鶴の「創意」との違いから『女賊』における翻案の「眼目」を探り、「自らの愚行をも省みず、内実のない〈血筋〉にのみこだわる人の姿を、この『女賊』を通じてアイロニックに描きたかったのではなかったか」と推論する。[4]両論ともに表現の細部と全体とを総合した示唆に富む研究である。それらの成果を受けて、戦時体制下という時代との関わりに着目した渡辺善雄の論考は、「翻案の形で発禁すれすれの小説を書こうとした」太宰の戦略を分析している。[5]本稿もそうした同時代性を視野に入れ、翻案の意図や効果にも注意しながら考察を深める。

〈仏教説話〉として読むことができる「腹からの女追剝」に、太宰はどのような感興を覚えたのだろうか。西鶴の文章に特有の速度感は減殺されるものの、微に入り細をうがつ加筆によって『女賊』は、悪心の自覚から発心に到達するという〈仏教説話〉の枠組みを相対化する現代小説に昇華された。『新釈諸国噺』の他の作品もそうであるように、同時代の思潮、風潮に応答すると同時に、時代を超越する普遍的な問いかけがなされているのである。これから、その魅力の一端を解き明かしてみたい。

*釧路高専創造工学科一般教育部門（国語）

Obsession for Acknowledgement

一

『新可笑記』の叙述とは異なり、『女賊』における姉妹の母は、「いささか由緒のある公卿の血筋を受けて、むかしはなかなか羽振りのよかつた人[6]」の娘として登場する。武家から公卿へという設定の変更が、姉妹の父、すなわち「髭さふらふの大尽」の形象にも影響を与えているものと考えられる。『女賊』に描かれた二人の男性の姿に目を向け、その特質を明らかにしてみよう。そもそも、「腹からの女追剝」では、両者ともに特異とまではいいがたい、類型的な人物にすぎなかったことを確かめておきたい。

後奈良院大永二年の春、陸奥に隠れ無き盗賊の名取川瀬越の某とて、往来の人を殺害めて金銀荷物押領して、世の外なる分限と成り、身の程知らぬ奢を極め、都を見る始めとて人数多にて上りけるが、遊興の余りに美女を見出だし是れ恋ひ佗びける。其人は昔に衰へる人の息女なるが邪なる人とも知らず、渡世の心安きは都より東も住み好かるべし、女に定まる家無しとて其盗賊に賜はれば、馬乗物を急がせ古里に立ち帰り、彼の美女を愛して世を世盛と暮しぬ。

旅人から奪い取った金品で大金持ちとなり、贅沢三昧に耽る「名取川瀬越の某」が次に目指したのは都だった。そこでこの山賊は恋をする。心を奪われた美女は、昔日の勢いを失った人の娘であった。その人は婿となる男の罪業に気づかず、あろうことか娘を東国に送り出してしまう。こうして花嫁を伴い、そそくさと地元に帰った盗賊は、我が世の春を謳歌することとなった。

いくたびも罪を重ねてきた「盗賊」の繁栄と、落魄の末に分別をも失った者の悲哀とが対照的に捉えられている。「渡世」の辛さを味わい尽くしたらしい「昔に衰へたる人」は、山賊に狙われた「往来の人」と同様、故知らぬ悲運を背負う者を表象している。魅入られたように判断の目を曇らせることも、悲運の帰結としてはふさわしかろう。ここまでのところでは、「盗賊」の悪運の強さばかりが前景化するのである。

では、太宰は『女賊』で「腹からの女追剝」をどのように書き換えたのだろうか。そこで見逃せないのは、この二人の男性が偏執性を帯びた人物として、表裏をなす構図のなかで、それぞれに潤色を施されることである。まず、「盗賊」の形象をたどってみよう。

後柏原天皇大永年間、陸奥一円にかくれなき瀬越の何がしといふ大賊、仙台名取川の上流、笹谷峠の付近に住み、往来の旅人をあやめて金銀荷物押領し、その上、山賊にはめづらしく吝嗇の男で、むだ使ひは一切つつしみ、三十歳を少し出たばかりの若さながら、しこたまためて底知れぬ大長者になり、立派な口髭を生やして挙措動作も重々しく、山賊には付き物の熊の毛皮などは着ないで、紬の着物に紋付きのお羽織をひつかけ、謡曲なども少したしなみ、そのせゐか言葉つきも東北の方言と違つてゐて、何々にて候、などといかめしく言ひ、女ぎらひか未だに独身、酒は飲むが、女はてんで眼中に無い様子で、かつて一度も好色の素振りを見せた事は無く、たまに手下の者が里から女をさらつて来たりすると眉をひそめ、いやしき女にたはむれるは男子の恥辱に候、と言ひ、ただちに女を里に返させ、手下の者たちが、親分の女ぎらひは玉に疵だ、と無遠慮に批評するのを聞いてにやりと笑ひ、仙台には美人が少く候、と呟いて何やら溜息をつき、山賊に似合はぬ高邁の趣味を持つてゐる男のやうにも見えた。

後奈良天皇が即位したのは大永六（一五二六）年のことであった。杉本好伸が指摘するとおり、太宰は西鶴の「歴史的誤謬を正し[7]」たことになる。現時点で、その修正が何に依拠してなされたのかは分からない。ただ、十六世紀前半の室町期を小説の舞台とするにあたり、歴史的事実をゆるがせにしない意識だけは表明しておきたかったのだろう。この時代背景が「公卿」を登場させる重要な根拠となるからである。

西鶴が形作った「盗賊」の類型性を相対化するように、太宰の創作は「大賊」の人となり、挙止動作の細部にまで及んでいる。傍線部に見られるように、「山賊」から連想される属性は次々と反転される。そこには、「立派な口髭」を蓄え、「手下の者」の不行儀をたしなめて、「何やら溜息をつ」く物憂げな若者がいる。はたして、「瀬越の何がし」が志向すること、理想とする姿とは何か。鄙びた風情を差異化する服装や言葉遣い、奢侈や好色という欲望の自制はいずれも、観念的に「雅」を体現する在り方といえよう。宮廷風・都会風であることを表す動詞「宮ぶ」の連用形が名詞化したとされる「雅」の特質は、上品さ

を基底に据えた自己抑制的な態度にある。

九鬼周造は『「いき」の構造』において「いき」との関連で「雅」にふれ、「上品と地味と渋み」とをその特性の要件として提示した[8]。九鬼によれば、「地味」・「渋み」は対他的な消極性を表す様態とされる。「瀬越の何がし」が演じようとしていたのは都風の装い、振る舞いだった。もちろん、それは耳学問に依拠した模倣にすぎない。「陸奥」には、その出来映えを査定する者もいないであろう。それゆえ、その演技は孤独な努力といえる。しかし、この男が遠望していたのは、都に上る自分の姿にほかならなかった。

観念上の都人を手本にひたすら表向きの構えを作り上げる「瀬越の何がし」は一方で、日々「往来の旅人をあやめ」て「金銀荷物」を手に入れていた。風雅と野蛮とが内在するこの男は、「腹からの女追剝」とは違い、「奢」の対極である「吝嗇」を実践する。ここで、倹約と貯蓄こそ戦時下の国民に下された至上命令だったことが想起されよう。大蔵省が決定する目標額に向けた精励が、あらゆる情報媒体を通じて呼びかけられ、必然として鞏固な同調圧力が発生した。初出誌の「月刊東北」を見ると、『仙台伝奇　髭候の大尽』の最初の頁には、次のような広告が挿入されている。「貯蓄も追撃戦　新目標額四百十億円の完遂―郵便年金―」。表現は享受される時空間との連関を抜きにしてはありえない。山賊の心掛け、実践との隠微な符合は偶然といえるのだろうか。

実は、蓄財に執心する動機もまた、都への憧れであった。「或る年の春、容貌見にくからぬ手下五人」とともに「都にのぼり、自分は東の田舎大尽の如くすべて鷹揚に最上等の宿舎に泊り、毎日のんきに京の見物、日頃けちくさくため込んだのも今日この日の為らしく、惜しげも無く金銀をまき散ら」すという派手な浪費に走るのである。豪遊の噂は瞬く間に広がり、「瀬越の何がし」は都の人々から「髭さふらふの大尽」と呼ばれるようになる。

やがて島原の遊びにもどうやら厭きた様子で、毎日ぶらりぶらりと手下を引連れて都大路を歩きまはり、或る日、古い大きな家の崩れかかつた土塀のわれ目から、ちらと見えた女の姿に足をとどめ、手にしてゐた扇子をはたと落して、小山の動くみたいに肩で烈しく溜息をつき、シばらスい、と思はず東北訛をまる出しにして呻き、なほもその、花盛りの梨の木の下でその弟とも見える上品な男の子と手鞠をついて遊んでゐる若い娘の姿に、阿呆の如く口をあいて見とれてゐた。

「遊興（いうきよう）の余りに美女（びぢよ）を見出だし是れ恋ひ佗（わ）びける」場面はこうして戯画的に描かれる。『新釈諸国噺』や『お伽草紙』（昭和20・10 筑摩書房）で太宰が駆使した〈うがち〉の手法をここにも見ることができる。一見するに、『源氏物語』における北山での垣間見を彷彿とさせる常套的な設定ではあるが、「ちらと見えた女の姿」に魅了される「髭さふらふの大尽」は、光源氏をはじめとする物語の主人公たちとは異なり、本性をやすやすと露顕させてしまう。それまで、「物憂さうな顔して溜息をつき、都にも美人は少く候、と呟」いていたはずの「髭さふらふの大尽」は、長年の望みがかなう機会に遭遇し、我を忘れる。本心の表出である「シばらスい」はこの男の純情を映し出すとともに、日常的な「雅」の演技がいかに無理な虚飾であるかを証し立てるであろう。

二

垣間見の翌日、「髭さふらふの大尽」は「五人の手下」に命じて「土塀の家」に「金銀綾錦のたぐひの重宝をおびただしく持参させ」、やにわに「お姫様を是非とも貰ひ受けたし」と、「強硬の談判」を持ち掛けさせる。

その家の老主人は、いささか由緒のある公卿の血筋を受けて、むかしはなかなか羽振りのよかつた人であるが、名誉心が強すぎて、なほその上の出世を望み、付合ひを派手にして日夜顕官に饗応し、かへつて馬鹿にされておまけに財産をことごとく失ひ、何もかも駄目になり、いまは崩れる土塀を支へる力も無く中風の気味さへ現はれて来て、わななく手でさてもこの世は夢まぼろしなどとへたくその和歌を鼻紙の表裏に書きしたためて、その日その日の憂さを晴らしてゐる有様だつたので、この突然の申込みにはじめは少からず面くらつたものの、さて、眼前に山と積まれた金銀財宝を眺めて、これだけあれば、ふたたび大官に饗応し、華やかに世に浮び上る事が出来るぞと、れいの虚栄心がむらむらと起り、

西鶴の文章では「昔に衰へる人」としか書かれていなかった人物が俄然生気を帯びて立ち現れる。太宰の想像力はきわめて闊達に働いているといわねばな

らない。先ほどふれた「後柏原天皇大永年間」というこの小説の時代設定は、「いささか由緒のある公卿の血筋を受け」た「老主人」の窮乏に現実感を与える。朝廷の威信を失墜させた承久の乱以降、とりわけ応仁・文明の乱の後、貴族たちの暮らし向きは楽ではなかった。[9] この時代を生きた公卿・三条西実隆の日常を活写した歴史学者・原勝郎は、「皇室の供御も十分とはまいらなかつた時代であるからして、公卿の困つたのはむしろ怪しむに足らぬことであらう」と簡潔に推測する。[10]「崩れる土塀」には、公卿たちの零落が象徴されてもいた。「眼前に山と積まれた金銀財宝」に「名誉心」や「虚栄心」を再燃させる「老主人」は、苦境にある「顕官」たちに取り入って、「華やかに世に浮び上る」ことを夢見るのである。

さらに〈うがち〉は続く。「さてもこの世は夢まぼろしなどとへたくその和歌」を詠むことを気散じにしていた「老主人」の陳腐な趣向を揶揄することで、その真意との隔たりが浮かび上がる仕掛けになっている。古来、「さてもこの世は夢まぼろし」という主題は、多くの和歌に詠み込まれてきた。その着想の根底には、『維摩経』第二章（「方便品第二」）に見える「十喩」の一つ、「是の身は夢の如し、虚妄の見為り」[11]の一節がある。例えば、大永四（一五二四）年、古希を迎えた三条西実隆は来し方、そして今をこう詠んでいた。

覚鑁上人の詠歌に「夢の中は夢も現も夢なればさめなば夢も現とを知れ」といへるは、
続後拾遺集にや、思ひ出られて、
いつさめん現も知らず七十の今日だに同じ夢の世中[12]

老境に至ってもなお、迷妄に満ちた現実から目覚めることは難しい。所詮は夢幻に等しい世の中とは知りながら、こうして七十年在り続けていることだ。「此身如夢」の教えから長寿を捉え直した、苦味の籠もる歌といえよう。「世中を夢と見る見るはかなくも猶おどろかぬわが心哉」[13]と西行が嘆いたような、悟りに到達しない（「おどろかぬ」）自己への省察が、七十年という年月の実感をよりどころとして深められている。

それにひき替え、すでに詠み尽くされた感のあるこの主題に、「老主人」の歌は何らの新味を加えるものではないということなのだろう。語り手は、歌を引用する価値すら認めていないのである。その厳しい評価は、「老主人」の言動に認められる、「此身如夢」の悟りとは懸け離れた執着の深さを根拠としていたのではないか。「髭さふらふの大尽」の申し入れに、「田舎者だつて何だつて金持ちなら結構、この縁談は悪くない」と考え二つ返事で応諾する「老主人」は、娘を説得するにあたっても、欲得ずくの妄言を吐き散らす。

女三界に家なし、ここはお前の家ではない、お前の弟がこの家を継ぐのだからお前はこの家には不要である、女三界に家なしとはここのところだ、とひどい乱暴な説教をして娘を泣かせ、何を泣くか、お父さんはお前のために立派な婿を見つけて来てあげたのに、めそめそ泣くとは大不孝、と中風の気味で震へる腕を振りあげて娘を打つ真似をして、都の人は色は白いが貧乏でいけない、あづまの人は毛深くて間の抜けた顔をしてゐるが女にはあまいやうだ、行きなさい、すぐに山奥へでもどこへでも行きなさい、死んだお母さんもよろこぶだらう、お父さんの事は心配するな、わしはこれからまた一旗挙げるのだ、承知か、おお、承知してくれるか、女三界に家なし、どこにゐたつて駄目なものだよ、などと変な事まで口走り、

事を急ごうと焦るあまり、娘への説諭は支離滅裂な申し渡しに転じている。「老主人」にとっては「これからまた一旗挙げる」こと以外眼中にない。拙劣なお為ごかしが空疎に響くのはそのためであった。確かに、「女三界に家なし」は当時の通念だとしても、その繰り返しの余勢として、「どこにゐたつて駄目なものだよ」という縁談にはふさわしからぬ呪いの言葉が投げかけられるのである。

「立派な婿」と交わした「候言葉」の裏面には、このような暴力が潜んでいたことになる。義理の父子となる二人の対面は、それぞれの内面を「候言葉」に隠し合う交渉の場であった。服装や挙措へのこだわりと同じく、見せかけの言語体系として「候言葉」も共有されていたのである。それは、実感の伴わない無常観を「へたくその和歌」に仕立て上げていた「老主人」にも、溜息まじりに憂愁を漂わせ、「雅」を演じていた「髭さふらふの大尽」にも通底する偽りに満ちた装いだった。こうした照応は、自らの執着のためには旅人を、我が娘を犠牲にしてかまわないという他者の物象化においても確かめられる。

「父親の俗物性が娘の運命を狂わせるという物語」[14]（木村小夜）はこうして、縁切り同然に手放される娘の「承知」によって次の局面を迎える。「わかれの挨拶も上の空」で娘を見送った「老主人」は、「家へ帰つて五日目に心臓麻痺を起して頓死したとやら、ひとの行方は知れぬもの」と素っ気なく語られ、小説世界から退場する。「いささか由緒のある公卿の血筋を受け」た人に見出された「名誉心」・「虚栄心」の醜さは、西鶴が立ち入らなかった欲望の実態を偏執的に拡大したものだった。「羽振りのよかつた」かつての日々が忘れられず、「華やかに世に浮び上る」機会を、「老主人」は虎視眈々と待っていた。[15]太宰によって創出された「老主人」の執着は、他者からの〈承認〉を切望することに起因していたのである。

三

都から東国へと下る「十七の娘」は、旅中泣きに泣いて「山賊たちをひどく手こずらせ」たが、「古巣の山寨にたどり着いた頃」からは「統領に少しなついて落ちつき」を見せ始める。「女はかうなると度胸がよい、ままよと観念して」、それからは一気に「夫の悪い渡世」になじむ様子が語られる。

夫の憎むべき所業も見馴れるに随ひ何だか勇しくたのもしく思はれて来て、亭主が一仕事して帰るといそいそ足など洗つてやり、けふの獲物は何、と笑つて尋ね、旅人から奪つて来た小袖をひろげて、これは私には少し派手よ、こんどはも少し地味なのをたのむわ、と言つてけろりとして、手下どものむごい手柄話を眼を細めて聞いてよろこび、後には自分も草鞋をはいて夫について行き、平気で悪事の手伝ひをして、いまは根からのあさましい女山賊になりさがり、顔は以前に変らず美しかつたが眼にはいやな光りがあり、夫の山刀を井戸端にしやがんで熱心に研いでゐる時の姿などには鬼女のやうな凄い気配が感ぜられた。

山賊の日常に馴れ罪業を重ねる女賊の描写は、行動の残忍さだけではなく、容貌の美しさを捉えることで凄みが加わる。「亭主」への一見無遠慮な注文は「仕事」に張り合いを持たせる〈承認〉の合図でもあるのだろう。夫の非道な稼業が勇猛な活動に評価を転じたように、強奪と娯楽との境界もいつしか曖昧になり、「花盛りの梨の木の下でその弟とも見える上品な男の子と手鞠をついて遊んでゐ」た「若い娘」は「鬼女」と見紛う異類の域に足を踏み入れている。こうした夫の悪心への同調は「腹からの女追剝」にも「馴めば其血に染まり、剝ぎ取る小袖の今宵は仕合と云ふを嬉しく、酷き物語も快く切刃を付けし山刀も怖ろしからず、自ら夫の悪心に同じ」と素描されてはいたが、「平気で悪事の手伝ひ」までさせたのは太宰の演出であった。女の言動から析出される「己自身の悪への無自覚」[16]という木村小夜の指摘は、「改変」の核心を鮮やかに照らす。無邪気さを湛えた「根からのあさましい女山賊」の誕生は、この小説の結末に原典とは異なる影を落とすことになる。

「やがてこの鬼女も身ごもり」、二人の娘の母親となった。ここでも太宰は姉妹の容姿や気性を精細に書き分ける。長女の「春枝」は「色白く唇小さく赤い、京風の美人」、二歳下の次女「お夏」は「父に似て色浅黒く眼が吊り上つたきかぬ気の顔立ちの子」と、両親の特色を分け持たせ、気質の違いを明確にするのである。同母姉妹を表す〈女はらから〉という設定は、『伊勢物語』第一段の影響で恋愛物語への発展を期待させる文化表象としてあった。しかし、西鶴はその可能性を絶ち、太宰もそれぞれに女性としての自意識を語らせるに留める。

鬼の子らしく荒々しく山坂を駈け廻つて遊び、その遊びもままごとなどでは無く、ひとりは旅人、ひとりは山賊、おい待て、命が惜しいか金が惜しいかとひとりが言へば、ひとりは助けて！　と叫んでけはしい崖をするすると降りて逃げるを、待て待て、と追つてつかまへ大笑ひして、母親は是を見て悲しがるわけでもなく、かへつて薙刀など与へて旅人をあやめる稽古をさせ、天を恐れぬ悪業、その行方もおそろしく、果せる哉、春枝十八お夏十六の冬に、父の山賊に天罰下り、雪崩の下敷になつて五体の骨々微塵にくだけ、眼もあてられぬむごたらしい死にざまをして、母子なげく中にも、手下どもは悪人の本性をあらはして親分のしこたまためた金銀財宝諸道具食料ことごとく持ち去り、母子はたちまち雪深い山中で暮しに窮した。

姉妹が山賊ごっこに興じるのは、それにふさわしい環境に二人が育ったからにほかならない。忌まわしい生業ながら、まさしく無邪気にもそこに遊戯性を

持ち込むところは母親と相似する。〈孟母三遷〉を反転させたかのような母親の指導を、「父の山賊」はどう見ていたのだろうか。この時点ですでに父は影が薄く、無残な最期は予兆されていたといえよう。「天罰」の元凶は、娘たちに殺人を含め山賊稼業の訓練をさせてきた母の教育だけではなく、そのような環境を黙認してきたであろう父の無責任にもある、と解釈できる。[17]「此夫病死して」と原典にあるところをことさら具体的に書き換えた『女賊』は、「髭さふらふの大尽」の罪業の深さに見合う応報によって、栄華からの転落を刻みつけたのである。その意味で、「果せる哉」という語り手の批評は、共同体の慣習や倫理を代弁する共感のしるしであった。「腹からの女追剝」はここで、亡き夫に倣い山賊となる母親の決断にもやむを得ない事情があったことを記す。

残る物とて鑓長刀、直なる心を今は歪めて今日を暮せる便りも無くて、男の為なる夜の容、街道に出でて、手に合ふ旅人の物を奪ひ取り一日を送りぬ。二人の娘も大人しく成れるに、里近き今日の細布織り習はせる業は無くて、夫の悪を是れにまで伝へて怖ろしく拵へて、武士は避けて町人里人を嚇して、何に由らず取りて参れと勧めける。容優しければ情の道も知るべき娘ども、性は元を顕はし父の心に変らず、毎夜街にて母を羽護込みける。

夫が遺した物は「鑓長刀」のみ、さしあたって今日の生活を成り立たせるには、武家の血を引く「直なる心」を「歪めて」でも、聞き知った山賊の生業をまね、相手を選んで金品を略奪するよりほかはない。その背後には、まだ幼い娘たちの養育という課題があった。西鶴の筆遣いは母親の心情に寄り添い、同情的である。成長を遂げた「二人の娘」は上品な美貌の裏側に父と同じく悪心を宿らせていた。自らは廃業したらしい母親は、娘たちに身の安全を第一に、「何に由らず取りて参れ」と指示する。恋も知らぬ娘二人は母のために精勤するのだった。手段はともかくとして、母への〈孝〉を忘れてはいない。

一方の『女賊』では、父の死からほどなく、山賊稼業は姉妹へと引き継がれる。「いままで通り、旅人をやつつけようよ」と「威勢よく」提案したのは「勝気のお夏」だった。「妹にくらべて少しおとなしい姉の春枝」は「お母さんにお怪我があつては大変だから」と留守番をさせ、ともに「山男の身なりで」出かけてゆく。

町人里人の弱さうな者を捜し出してはおどし、女心はこまかく、懐中の金子はもとより、にぎりめし、鼻紙、お守り、火打石、爪楊枝のはてまで一物も余さず奪ひ、家へ帰つて、財布の中の金銀よりは、その財布の縞柄の美しきを喜び、次第にこのいまはしき仕事にはげみが出て来て、もはや心底からのおそろしい山賊になつてしまつたものの如く、雪の峠をたまに通る旅人を待ち伏せてゐるだけでは獲物が少くてつまらぬなどと、すつかり大胆になつて里近くまで押しかけ、里の女のつまらぬ櫛笄でも手に入れると有頂天になり、

原典との差異は、横領した金品の目録を示すことで「女心」の「こまか」さを前景に押し出し、「このいまはしき仕事にはげみが出て来」る過程を具体的に叙述した点にある。増長は止まらない。他人の所有物を奪い取ることが目的化し、姉妹が跳梁する範囲は広がる一方のようだ。姉妹と同様に相変わらず無邪気な母親の反応を行間に読むこともできよう。渡辺善雄は『戦時家庭教育指導要綱』（昭和17・5 文部省社会教育局）との比較で、同時代における「適切なしつけ」に逆行する「『無自覚』な母親像」[18]をそこに認める。戦時体制にあって、それは看過しがたい逸脱であった。

時代との不協和音は、この作品の素材そのものからも聞こえてくる。『仙台伝奇 髭候の大尽』が発表される三か月ほど前、「朝日新聞」に次のような記事が載った。見出しには「戦争と犯罪　見たぞ戦ふ国の心意気　清純を示す激減ぶり」とある。

戦争と犯罪はつきものだといはれる。古今東西を問はず、戦時となると犯罪が激増する。またそれはその国の当面する戦局の如何によつて傾向、現象、件数に異なる統計が現れる、といふことが犯罪研究の上の鉄則であつた。但しそれは舶来の学問上のことである。世界が戦塵のなかに巻き込まれてから注意深い読者は屢々戦時犯罪の激増に悩む外電を見逃さなかつたはずだ。同時に日本の新聞紙上に急激に犯罪記事が姿をひそめたことに奇異の感じを持つたかも知れない。事実わが国ではいぶかるほど犯罪が激減したのである。まして心中だの桃色事件などは殆ど影をひそめてしまつた。統計が物語るやうに昭和四、五年頃に比し、総体的に犯罪は半減したのだ。犯罪科学上の鉄

則と矛盾するところに日本的な画然たる性格がある。[19]

対象は何であれ、敵国に対する自国の優越性を言挙げすることは、戦時下のマス・メディアが進んで取り入れた編集方針だった。ナショナリティへの執着は、言論活動の許可証として機能したのである。この記事も近年の「我が国」における犯罪の「激減」を海外の「激増」と対比し、最終的には「日本的」なるものの唯一性にたどり着く。「清純」な国民性を基礎に据え、「戦ふ国の心意気」の違いを見せつける実績、と自讃する文章は晴れやかだ。確かに、新聞が伝えた凶悪犯罪の件数は〈大東亜戦争〉の間、漸減傾向にあった。昭和十九年の「朝日新聞」に載った殺人または傷害事件の記事は月平均一件にも満たない。強盗・窃盗も前年比で四分の一ほどになっている。新聞の総頁数が削減されたことや戦局報道を最優先する編集などの影響はあろうが、「銃後のたゝかふ気組みにおいてタガのゆるんでゐない実証」[20]と結論づけたくなる変化が見られる。

そのような「銃後」に、太宰が『女賊』(『仙台伝奇 髭候の大尽』)を差し出したのはなぜなのだろうか。これまで見てきたように、『女賊』には〈犯罪小説〉の一面がある。登場人物にはそれぞれの邪念があり、それを誘因とする言動があった。この小説の終盤に置かれた〈発心〉の内実を掘り下げ、その効果を検証してみよう。

四

発端は、「或る日、里近くで旅の絹商人をおどして得た白絹二反」だった。姉妹はいつものように、それを山分けにする。ところが、「夕暮れの雪道を急ぎ帰る途中」、姉に欲心が兆した。正月の「晴衣」を仕立てるには一反では足りない。裏地用にもう一反が必要だ。「自身の荒くれた男姿を情け無く思ふ事もあり、熊の毛皮の下に赤い細帯などこつそりしめてみたり」することもあった姉の頭には、「藤色に染め」上げた表地も鮮やかな袷を身にまとう己の姿が浮かんでいたのだろう。妹の手許にある反物が無性に欲しくなり、「それとなく」、『『お夏や、お前この白絹をどうする気なの？』』とたずねてみた。お夏は「お父さんも、お仕事の時には」締めていた「白絹の鉢巻」を「たくさん」作るつもりだと言う。

「まあ、そんな、つまらない。ね、いい子だから、姉さんにそれをゆづつてくれない？　こんど、何かまたいいものが手にはひつた時には姉さんは、みんなお前にあげるから。」

「いやよ。」と妹は強く首を振つた。「いや、いや。あたしは前から真白な鉢巻をほしいと思つてゐたのよ。旅人をおどかすのに、白鉢巻でもしてないと気勢があがらなくて工合がわるいわ。」

「そんな馬鹿な事を言はないで、ね、後生だから。」

「いや！　姉さん、しつつこいわよ。」

へんに気まづくなつてしまつた。

「みんなお前にあげるから」という破格の条件提示も、「後生だから」という懇願も、お夏には全く通じない。実のところ、「しつつこい」のは妹も一緒だった。執着という観点からいえば、晴衣・鉢巻に差はない。違いがあるとすれば、袷一着を仕立て上げるには「白絹二反」がどうしても要るため、姉の執着のほうがより深く感じられることだろう。「腹からの女追剝」では「絹十疋」つまり二十反が「置き忘れ」られていたことになっていた。太宰は姉の切迫感を引き出す目的で、二反に減じたのである。

無骨者の妹を説得することに失敗した姉は、「そんなに手きびしく断られるといよいよ総身が燃え立つやうに欲しくなり」、「うはべはおだやかに笑ひながら、『ごめんね、もう要らないわよ』」と言ったときにはもう、「この妹を殺して絹を奪はう」と考えていた。語り手はその心の動きを「普段おとなしい子こそ思ひつめた時にかへつて残酷のおそろしい罪を犯す」と解説する。外見からはうかがい知ることのできない内面の暗闇、悪心の遍在が対象化されている。これまで妹に抱いていた、「帯でも櫛でもせつかくの獲物をこんな本当の男みたいな妹と二人でわけるのは馬鹿らしい、むだな事だ、にくい邪魔」という憎悪も噴き出し、姉はついに殺害の間合いをはかる。

さうだ、少しも早くと妹の油断を見すまし、刀の柄に手を掛けた、途端に、

「姉さん！　こはい！」と妹は姉にしがみつき、

「な、なに？」と姉はうろたへて妹に問へば妹は夕闇の谷底を指差し、見れば谷底は里人の墓地、いましも里の仏を火葬のさいちゆう、人焼く煙は異様

に黒く、耳をすませば、ぱちぱちはぜる気味悪い音も聞えて、一陣の風はただならぬ匂ひを吹き送り、さすがの女賊たちも全身鳥肌立つて、固く抱き合ひ、姉は思はずお念仏を称へ、人の末は皆このやうに焼かれるのだ、着物も何もはかないものだとふつと人の世の無常を観じて、わが心の恐ろしさに今更ながら身震ひして、とかくこの一反の絹のためさもしい考へを起すのだ、何も要らぬと手に持つてゐる反物を谷底の煙めがけて投げ込めば、妹もすぐに投げ込み、わつと泣き出して、

「姉さん、ごめん、あたし悪い子よ。あたしは、姉さんをたつたいままで殺さうと思つてゐたの。

現前する火葬の場が姉妹の多様な感覚を刺激し、「人の世の無常を観じ」るきっかけをもたらした。姉に続いて妹も「一反の絹」を「谷底の火焔」に投げ込み、執着の対象を断つ。妹にとっても白絹の反物は「鉢巻」の素材ではなく、「綺麗な着物」の生地としてあった。「あたしはこんな不器量な子だから、お洒落をすると笑はれるかと思つて、わざと男の子みたいな事ばかり言つてゐたのよ」と本心を明かした妹は、「姉さんを刀で突いてさうしてお母さんには、姉さんが旅人に殺されたと申し上げるつもりでゐた」ことも告白する。姉が反物の譲渡を「しつつこく」迫る理由も分かってはいたものの、妹は器量に関する引け目もあり、真意を伝えられないまま意地を張ってしまったのである。妹と変わらぬ殺意を抱いていた姉もまた、「ゆるすもゆるさぬも、それはあたしの事ですよ」と懺悔し、「二人は腰の刀も熊の毛皮も」火中に捨てて、「こんにちこれぎり浮世の望みを捨てん」と心に誓う。

この後、前非を悔い、母と二人の娘が揃って比丘尼へと姿を変えるものの、『女賊』に描かれた世界は、三人の発心にかすかな光明を求めるほかないほど、陰惨を極めていた。元禄の西鶴はといえば、『徒然草』第四段を下敷きに、「仏の道疎からず、心にくき三人比丘尼と成りぬ」と「腹からの女追剝」に発心譚の常道ともいうべき結末を用意し、さらに、『摩訶止観』をふまえて、「氷消えては清き水と成る例ぞかし」と三人が「無明」から救済されるであろうことを言祝ぐ。一方、『女賊』では、そうした予定調和的な落着は明らかに回避されていた。

笹谷峠のふもとの寺に行き老僧に向つて懺悔しその衣の裾にすがつてあけくれ念仏を称へ、これまであやめた旅人の菩提を弔つたとは頗る殊勝に似たれども、父子二代の積悪はたして如来の許し給ふや否や。

浄土教系の信仰にとって『無量寿経』に書かれた阿弥陀如来の誓願は本来、疑いの対象とはならない。いかなる「積悪」であろうとも「許し給ふ」ことが「如来」の誓いそのものだからである。とすれば、この作品を論ずる際、『女賊』の語り手が救済への懐疑を書き加えたことに注目するのは当然といえる。西鶴の表現を差異化した目的とは何か。ここでは、「父子二代の積悪」という罪業を「許し給ふ」ことの意味の広がりを見つめ直してみたい。はたして何を以て「如来の許し給ふ」ことと見なし得るのだろうか。

おわりに

昭和十九年五月一日の次官会議を経て、情報局から「戦時生活ノ明朗化ニ関スル件」という通達が出された。[21] それによれば、「戦局ノ緊迫ト諸施策ノ強化ニ対応シ」、「国民ニ適当ノ慰安ヲ与ヘ以テ長期戦遂行ニ必要ナル闊達ナル精神ノ涵養ニ資」することを「方針」として、「芸能、文芸、放送、出版物及新聞等ノ内容ニ於テモ健全明朗ニシテ興味アリ生活ニ潤ヲ与フルモノヲ一層加味スルモノトス」という指示が書かれている。後退戦を余儀なくされ、明らかな陰りが兆していた戦意の浮揚策として、政府は「明朗」な愉楽をも動員し、「長期戦」を乗り切ろうとしたのである。

『仙台伝奇　髭候の大尽』が掲載された「月刊東北」にも「各地明談朗話」という囲み記事が見える。話題となっているのは、「相変らず国民生活を思ふ優しい心で隣組の指導」にあたる前首相・東條英機（「その後の東條さん」）と釜石の日鉄製鉄所で開催された歌舞伎総見（「戦士へ芝居の贈物」）であった。これらがはたして「国民ニ適当ノ慰安ヲ与ヘ」られる「明談朗話」かどうかはともかく、「出版物」に要求されていた使命に忠実な編集とはいえよう。

同誌の広告表現もまた、戦う意志を煽動しつづけていた。「大戦果に応へよ」（宮城県機械器具工業統制組合）、「戦果に酔ふな　敵機は必ず来る　戦果に酔つて安易な考へを持つものがあつたら大変だ、敵機は必ず来るのだ、防空に万

全の備へを固めよう」（「生活拡充用ゴム製品 東北ゴム株式会社」）。小説本文の窮屈な判組にひきかえ、誌面に組み入れられた広告の空間はゆったりと確保されている。昭和十九年十月、久々に国民を熱狂させた「台湾東方海面における敵機動部隊捕捉殲滅戦」での「史上稀な大戦果」[22]を受け、今こそ気を引き締めて、敗走する敵を「追撃」する好機だという訴えは時宜にかなうものだった。しかし、後にそれは「幻の戦果」[23]にすぎなかったことが判明する。前線からの報告には、誤認や誇大な希望的観測が多く含まれていたのである。したがって、「戦果に酔ふ」ことははかなくも糠喜びに終わるのだが、少なくともこの一時期は、国内が束の間の「明朗」さを取り戻していたことは確かであろう。

こうした誌面の中に置かれた『仙台伝奇 髭候の大尽』を読むとき、「健全明朗」や戦意発揚という心性との隔たりは明瞭になる。では、その陰惨な物語の結末について前節末尾の問いへの答えを求めてみよう。

姉妹は忽然と無常を観じたとき、「永からぬ世に生れ殊に女の身としてかかる悪逆の暮し、後世のほども恐ろし」という感懐を抱く。ほぼ「腹からの女追剝」からの引き写しといってよいこの箇所に述べられた、「殊に女の身として」という強調を見逃してはならない。「女賊」とは元々、「女性」を表す仏教語であった。過去において、「女賊の人を害するは禁ずべきこと難し」（『大智度論』）[24]と、悟りの妨げと見なされていた事実がある。『女賊』と改題された作品名に、そのような女性観の影を探るとすれば、先述した「殊に女の身として」に加えて、「いやしき女にたはむれるは男子の恥辱に候」という「髭さふらふの大尽」の言葉が例示できよう。

原始仏教にはなかったとされる女性への差別観は、インド・中国を経由して伝播し、日本仏教にも深く根を下ろしていた。紀元前一～二世紀頃、部派分裂後に成立した〈五障三従〉という偏見は、長く女性を〈仏種〉の消滅した存在として見下すことに加担する。[25]唐代、南山律宗の祖・道宣がまとめた〈女人十悪〉は多くの書物で引用され、女性を貶める言説は補強された。[26]そのような非合理きわまりない観念の流布をふまえれば、「許し給ふ」ことの意味とは、古来多くの仏教説話が取り上げてきた〈女人往生〉を指すと考えてよいだろう。渡辺善雄が注視した「戦時下の社会にあって異彩を放つ」「可憐で残酷な女性像」[27]の形象は、「許容不可能な悪行」[28]（杉本好伸）ゆえに負った、救済を期待できないほどの罪業の重さを暗示することで、きわどい均衡を保っているのである。

しかし、一旦その「許し」を如来への、または仏法への帰依という実践に戻して考えてみるとどうだろうか。「父子二代の積悪」を執着の累積とすれば、「はたして如来の許し給ふや否や」という結びは、その執着からの解放、すなわち解脱が「三人比丘尼」には完遂できないのではないかという危惧を表してもいる。つまり、この懐疑は、「三人比丘尼」が早晩、仏道への帰依を逸脱する予感と読み替えられるのではないだろうか。「主体は権力への原初的服従を通じて創始される」[29]（ジュディス・バトラー）とすれば、信仰とは、ある教理への服従による主体化の営みである。その主体化が間断なく、かつ疑いなく続けられることを「許し」と呼ぶのだろう。既存の服従を解消し、別の何かに服従することで、新たな主体化は可能となる。発心譚に見られる、救済に収斂する閉じた服従化＝主体化の物語は、『女賊』において、信仰の絶対性を尊ぶ側から見れば、不埒な行く末に向けて開かれているのではないか。もちろん、こうした執着が解放される可能性の示唆は、「健全明朗」の対極にある、きわめて反時代的な問いかけだったのである。

注

1　『新可笑記』の本文は、日本古典全集『西鶴全集』第二（与謝野寛・正宗敦夫・与謝野晶子編纂校訂　大正15・6　日本古典全集刊行会）による。原則として、他の引用文も含め、仮名遣いおよびルビは原文のままとし、漢字は新字に統一した。文中の傍線は引用者による。

2　本文は『宝物集　閑居友　比良山古人霊託』（小泉弘・山田昭全・小島孝之・木下資一校注「新日本古典文学大系」40　平成5・11　岩波書店）による。

3　木村小夜「「女賊」における〈悪〉――太宰治『新釋諸國噺』試論――」（「叙説」平成3・12）『太宰治翻案作品論』第二章『新釋諸國噺』論　第七節「女賊」に加筆収載　平成13・2　和泉書院）

4　杉本好伸「太宰治と井原西鶴――新釋諸國噺「女賊」を中心に――」（「安田女子大學紀要」21　平成5・2）

5　渡辺善雄「「女賊」の位相――戦略としての翻案――」（「太宰治研究」11　平成15・6）

6　太宰治『女賊』の本文は『太宰治全集』7（平成10・10 筑摩書房）による。
7　注4に同じ。
8　九鬼周造『「いき」の構造』（昭和5・11 岩波書店）
9　外村展子「女房文学のゆくえ」（『岩波講座 日本文学史 第6巻 一五・一六世紀の文学』平成8・11 岩波書店）
10　原勝郎『東山時代に於ける一縉紳の生活』（昭和16・4 創元社）
11　植木雅俊『梵漢和対照・現代語訳 維摩経』（平成23・8 岩波書店）
12　三条西実隆『再昌草』本文は『中世和歌集 室町篇』（伊藤敬・荒木尚・稲田利徳・林達也校注「新日本古典文学大系」47 平成2・6 岩波書店）による。
13　本文は『西行全歌集』（久保田淳・吉野朋美校注 平成25・12 岩波文庫）による。
14　注3に同じ。
15　アクセル・ホネット『私たちのなかの私 承認論研究』第Ⅱ部 体系的帰結第5章「イデオロギーとしての承認――道徳と権力の関連について――」（日暮雅夫・三崎和志・出口剛司・庄司信・宮本真也訳 平成29・5 法政大学出版会）において「承認は、相手を一定の仕方で肯定するという最初の意図を反映する実践的態度のさまざまな形態の類〔概念〕と把握されるべきだろう」と論じられている。ルイ・アルチュセールの「イデオロギー概念」と討論するホネットは、「承認」の「積極的な性格」を支持し、それが「自律的に自分の人生目標を現実化する能力に対する間主体的な前提をなす」ことに論及する。「老主人」の言動に表れた執着の実態についても、〈醜さ〉とは異なる着眼点があり得よう。
16　注3に同じ。
17　注3論文で、木村小夜は「天罰」を「これまでの父自身の悪業から結果されたものとは読めず、むしろ母が娘達に人を殺すことを教えていたことの結果として置かれている」とする。
18　注5に同じ。
19　「朝日新聞」（昭和19・9・18）二面
20　注19に同じ。
21　「戦時生活ノ明朗化ニ関スル件」（情報局第二部放送課「大東亜戦争放送指針彙報」36 昭和19・5 『現代史史料』41「マス・メディア統制2」収載 昭和50・10 みすず書房）
22　「朝日新聞」（昭和19・10・17）一面
23　吉田裕『アジア・太平洋戦争』（平成19・8 岩波書店）
24　笠原一男『女人往生思想の系譜』（昭和50・9 吉川弘文館）
25　植木雅俊『仏教のなかの男女観』（平成16・3 岩波書店）
26　『女人愛執恠異録』（元文5・一七四〇年刊『仏教説話集成［一］』叢書江戸文庫44 西田耕三校訂 平成10・1 国書刊行会）「道宣律師之浄心戒勧云女人之十悪」には、「十悪」の解説に加えて、「つらつら経論釈の中を見侍るに、女人の過をとかせたまふ事、数かぎりもなき事なり」という記述が見られる。
27　注5に同じ。
28　注4に同じ。
29　ジュディス・バトラー『権力の心的な生 主体化＝服従化に関する諸理論』（佐藤嘉幸・清水知子訳 平成24・6 月曜社）